●モノグラフ 小学生ナウ

職業観

vol.3-6

©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智博
放送大学教授　深谷昌志・千葉市立園生小学校教諭　上杉賢士

目次

特集／**立身出世再考** …… 2

調査レポート／**職業観**

要約と提言 …… 6

1.職業へのあこがれと断念 …… 8

- なりたい職業 …… 9
- なれそうもない職業 …… 10
- 成績の持つ意味 …… 13

2.子どもの中の職業イメージ …… 17

- 行動特性と職業 …… 17
- イメージの明暗 …… 19
- なくてはならない仕事と自分 …… 20
- 好まれる職業の条件 …… 22

3.職業生活の設計 …… 23

- 職業の決定 …… 23
- 今後への見通し …… 25

まとめに代えて …… 27

シリーズ／子ども考現学

子どもの姿・昔と今(16) おやつ …… 29

資料1・調査票見本 …… 34

資料2・学年・性別集計表 …… 42

特集

立身出世再考

放送大学教授　深谷昌志

立身出世は悪か

「仰げば尊し」の中に、「身を立て、名をあげ」といった一節がある。子どもの頃、意味はよくわからないながら、遠い未来に夢を抱けるような気持ちがして、歌っていたのを想い起こす。

しかし、どうしたことか、立身出世は、終戦以降、家族制度や旧民法などとともに、葬り去られてしまったように思う。

一握りのエリートが、民意をかえりみず、戦争へと突入し、日本を敗戦のどん底におとし入れた。これからの民主社会では、一人ひとりの気持ちが社会に反映されなければならない。人間は誰しも平等なのであるから、特定の人たちが権力を握るのは望ましくない。

そうした心情から、立身出世的な見方が排斥されたのであろう。小学6年生の時に疎開先で終戦を迎え、飢えに苦しみつつ、中学へ入学した。そうした折、これからの生き方に希望を与えてくれたのが、『くにの歩み』であり、『民主主義』（いずれも、戦後まもなく編集された教科書）であった。

このように多感な思春期に戦後の新教育の洗礼を受けたため、現在でも、その頃の思い出が原体験となって、今までの生き方を支えてきた気持ちがする。

ふとした機会から、研究者の道に足を踏み入れて現在に及んでいるが、権力を恣意に行使しないことや、いかに不利に思えても、ことの是否は明らかにするなどの態度は貫き通してきたように思う。もっとも、研究者であったから、そうした態度をとりやすかったのも確かであろう。

それと同じように、立身出世を否定する気持ちは、中学時代に教えてもらった通りに、ごく近年まで、強く持っていたような気がする。しかし、考えてみると、戦後の立身出世否定論には、「あつものにこりてなますをふく」にも似た考え方があったように思える。なぜなら、仮に、エリートが専制的であったとしても、そうしたエリートのあり方が問題なので、だからと言って、エリートが無用とは言い難いからである。

何人かの人々が集まれば、おのずと、リーダーシップをとる人が生まれる。学級の子どもたちにせよ、部活動の集まり、PTA、そして、教師集団にせよ、リーダー不在のグループは存在しえない。したがって、そうした集団中でのリーダーシップで問題となるのは、そのリーダーがどのような手続きを経て選ばれ、そして、メンバーの意向をいかに受けとめ、さらに、メンバーのプラスになるような決定や実行力を示すかであろう。

まして、社会生活を考えると、リーダー不在がありえない以上、リーダー不要論は、かえって、正統的な手続きを踏まずに、いわば、かくれたリーダーが、リーダーの責任をとらずに、リーダーシップを発揮する状況を招きやすい。

第二次世界大戦中、イートンやハローなどのグラマースクール卒業生の中で、戦死者の比率が高かったと言う。それに対し、旧制の一高や三高の卒業生の場合、戦死者の割合はむしろ低めであった。あるいは、ニュールンベルグ裁判で、ナチの戦犯は、責任を認めたのに、日本のリーダーたちは責任をとれないと答えたと言う。

いずれも、日本のエリートの間に、エリートとしての自覚がいかに乏しかったことを伝える挿話だが、前者は、池田潔の『自由と規律』、後者は、丸山真男の『現代政治の思想と行動』という戦後を代表する良書の中で紹介されている内容である。

日本のリーダーが、仮にそうだとしたら、むしろ、そうしたリーダーを生まないために、リーダーに問われる資質は何か、そして、リーダーを輩出させる機構をどう作るべきか、あるいは、リーダーが専制化した時のチェックの制度をいかに構想すべきかなどを考えることが必要であろう。

だが現在、リーダーシップを持つのが悪であるかのような社会通念が定着している。残念ながら、そうした社会風土の中からは、良質のリーダーは求め難い気がする。

大きな目標が必要

それでも、おとなの場合は、まだ良い。しかし、子どもにとって、「身を立て、名をあげ」が望ましさを伴わない社会は必ずしも幸せとは言い難い気がする。

面接調査などの折、子どもたちに、つきたい仕事を尋ねると、幼稚園の保母さんやエンジニア、花屋、自分の家の仕事を継ぐなどの答えが返ってくる。そしてそうした中に、政治家や外交官、大きな会社の社長などを聞くことは少ない。たまに、総理大臣という子どももいるが、それは、言った方も冗談なら、聞く方も、「よく言うよ」と笑いとばす。

そうした状況に慣れてしまい、違和感を持たなくなった。しかし、アメリカの子どもたちは、どの子どもも、大統領や市長になる日を夢みると言う。グリーンスタイン(F.I.Greenstein)の『子どもと政治』(Children and Politics 松原治郎、高橋均訳、福村出版)などを見ると、子どもの声として、

「大統領は、私たちに自由を与えてくれます」

「市長は人々が安全に生活していけるように手助けをしてくれています」

「大統領は48州全体の問題すべてに頭を悩ましています。また、平和会議を開いて、恐ろしい戦争をやめさせてくれます」

「市長は公園や道路や学校を修理したり、雪が降ると、道路の雪かきをします」

などが挙げられている。

政治に対する信頼感が語られており、そうした背景から、政治家を志す子どもたちが生まれてくる。

しかし、政治に限らず、日本の子どもたちは、ビッグな目標を目指すのが悪でもあるかのような気持ちを抱いている。「末は博士か、大臣か」、あるいは、「大きくなったら、陸軍大将」は古すぎるにしても、子どもは、本来もっと大きな夢をみてもよいのではないだうか。

ある時期までの子どもたちは、伝記を読んで、自分の未来を夢みていた。野口英世伝を媒介として、難病の治療にあたる生活にあこがれ、そして、女の子はキュリー夫人伝を手がかりとして、科学者であると同時に、良き妻、そして、賢い母である生き方を理想のイメージに持つ。さらに、エジソンのように、発明家の一生もすばらしいと思うなどが、その一例となろう。

われわれおとなたちは、人生の長い期間を歩んできてしまっているから、今さら、逆戻りをすることはできない。しかし、子どもたちは、どの子どもも、どんな生活でも送れる可能性を秘めているのである。換言するなら、未来に夢を抱けるのが、子どもの特権であろう。

外国を旅すると、さまざまな日本人に会う機会が多い。かばんひとつで、アメリカを旅している商社マン、あるいは、包丁一本でアメリカに渡り、大きな日本風レストランを

してもらえるくらいの技術を磨けというように、子どもたちを動機づけることが必要であろう。

どの子どもにも、その子どもなりに、「身を立て、名をあげて」ほしいのである。ただし、そうした時に、弱い者へのいたわりを忘れずに、そして、自分の行動に責任を持ち、人のために尽くす生き方をしてほしいと思う。

もちろん、そうは言っても、人生の成功者となれるのは、ほんの一握りの子どもかもしれないのである。しかし、子どもの頃、青雲の志を立てた思いは、生涯忘れえない大事な財産となるだろう。

経営している人、そして、庭師としての技術を買われて、ヨーロッパを渡り歩いている老人、パリに美容室を開き、成功した若い女性など、小さな日本という枠を超え、学歴や出身に頼らずに、腕一本で活躍している人々である。

そうした人たちに会うと、頑張りと創意工夫する力さえあれば、活躍できるのが現代だと思う。

もちろん、ビッグに生きるのだけが、人生とは思わない。社会福祉などの領域で、地道な努力を続ける生活も、あるいは、報いられることの少ない職場を守り抜く人生も、自分を生かしきれているなら、立派なものであり、考え方によれば、ビッグな生き方でもある。

つまり、ビッグとは、自分なりに目標を決め、その対象にエネルギーを燃焼させる態度なのであろう。

しかし、子どもたちを見ていると、そうした導きの星ともいうべき人生観を持っていないように思える。頑張れば、何でもなれる。そうだとすれば、同じ花屋になりたいのなら、他では真似のできないくらいの個性を作れ、あるいは、技師として、世界的に力量を評価

本号では、子どもたちの職業観を問題にすることになるが、今までのデータでも、ビッグな目標への達成を断念している子どもが少なくなかった。小学生のうちから、オリている子どもである。

それだけに、"Boys and Girls be ambitious" と呼びかけたい気持ちがする。残念ながら、現在の社会は、そうしたモデルを求めにくいのが現実の姿なのかもしれない。しかし、そうであるなら、なおのこと、現在のおとなには求めにくいような、ビッグな生き方を目指してほしい。

すでに触れたように、"総理大臣になる" がジョークと受けとめられる子どもたちの感覚は、決して望ましくない。それと同時に、"ふつうのサラリーマンになり、家庭を大事にした生活を送りたい" という生き方も、夢がなさすぎる気がする。小さくまとまりがちな子どもたちに、未来が開かれていることを教え、大きな目標を持たせるのは、われわれおとなたちの責任のように思われてならない。

調査レポート／職業観

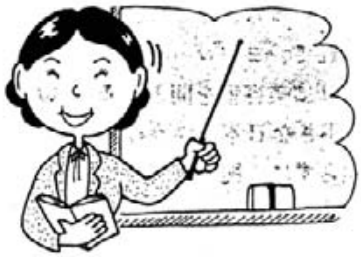
千葉市立園生小学校教諭　上杉賢士
放送大学教授　深谷昌志

要約

① プロスポーツの選手

男子の描く夢の職業ナンバー1は、「プロスポーツの選手」である(44%)。次いで、「サラリーマン」(24%)、「大会社の社長」(21%)の順となる。プロスポーツとサラリーマンとの開きが目につく。　(図1)

② 小学校の先生



女子が夢みるのは、「小学校の先生」(43%)、「デザイナー」(32%)、「テレビタレント」(28%)の順である。
(図2)

③ 断念率が高い

男女ともに、なりたい職業の上位2つを除けば、達成を断念している子どもの方が多く、勉強の成績に自信を持てない子どもほど断念する割合が高い。　(図3・図4)

④ 職業選択の条件

定時帰宅が職業選択の第一条件として支持され(約4分の3)、マイホーム志向が顕著である。　(図11)

⑤ 職業生活への見通し

女子では、「好きな仕事を一生続けたい」が6割いる半面、男性と対等にと考えている子どもは15%にすぎない。（図14）

⑥ 暮らしむき

今より、収入が大幅に増えるということは期待できないが、暮らしは良くなり、家族みんなが幸せになるという、明るい見通しを持っている。（図16）

提言

自分がおとなになった時の職業を"夢"として語る時代は終わって、現実的な対応が子どもの世界にも要求され始めている。しかも、自らの学業成績に自信を持てない子どもほど、職業的達成の断念率が高いという事実は、学力至上主義に裏打ちされた悲しい子ども時代を描き出している。

考えてみれば、職と住がほぼ完全に分離された現代の生活形態では、父親の働く姿からではなく、事件や犯罪を伝えるニュースなどを媒介として、間接的に職業イメージが形成されることも考えられよう。そうした情報を子どもたちから遮断することが現実的に無理である以上、身の回りにいるおとなの職業生活の中に、子どもたちへの説得力を期待するしか途はないのかもしれない。

それでも、子どもたちは将来の生活に明るい希望を抱いている。そうした灯を大切に保存してやりながらも、一方で現実の厳しさを伝えると同時に、それに打ち勝つ術と喜びを子どもの時代にこそ知らせてやりたいものである。現実的な妥協の必要性は、今後否応なしに覚えるものであろうから。

サンプル数

（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	282	293	575
5　年	266	246	512
6　年	227	251	478
計	775	790	1,565

調査概要

対象●東京・千葉・栃木の小学校4～6年生
時期●昭和58年1～2月
方法●学校通しによる質問紙調査

1．職業へのあこがれと断念

現代の青少年の〝モラトリアム化〟が、社会的な問題となっている。さまざまな調査データが描き出す、確かな達成動機を獲得できないまま、意欲や自信を失いかけた子どもたちの現状に、問題の深刻さを認めないわけにはいかない。

かつて、子どもたちは、ブラウン管に登場するヒーローに、あるいはまた、いわゆる花形職業に従事する人々の華やかさに、大いなるあこがれを抱き、将来の自らの姿とダブらせて夢をふくらませた。もともと子どもという存在は、将来への確かな生活設計に基づいて今を生きるというわけではない。成長のそれぞれのステップで、与えられた条件をフルに利用しながら精一杯生きることが、豊かな成長を保証してきたのである。したがって、将来、何になりたいかという問いは、何になれるかという現実的、具体的可能性を問うのではなく、将来へ向けての〝夢〟の大きさと方向を確かめるために用意される。

それでは、現代の子どもたちが思い描く夢の中味は、一体どうなっているのだろうか。早速、調査データを読み進めることにしよう。

なりたい職業

子どもたちの抱く職業観の中で、まず気になるのは、素朴に、現在の子どもたちには、一体どんな職業が人気があるかということであろう。

用意した15の職業について、大きくなったらなりたいなと思うものに○をつけさせた結果が、図1と図2である。

男子と女子では、おもむきが随分異なることは当然のことであるが、まず、図1の男子の結果から見てみることにしよう。男子に最も人気のあるのは、「プロスポーツの選手」である(44%)。"巨人・大鵬・玉子焼"と好みを形容された時代と同様、現在でもその傾向は変わらない。"太田－原－荒木"と続く高校野球界のヒーローが、異常人気を博す昨今の状況が、少年たちの心に少なからず影響を与えていることは容易に想像がつく。しかしそのフィーバーぶりは、確実に"王－長島"の時代を凌ぎ、社会問題にまで発展していることを考えると、他の職業に比べて圧倒的に人気を集めていることが気にならないわけではない。

さて、その「プロスポーツの選手」に続く第2位に「サラリーマン」(24%)が位置する。早くも、夢から現実的可能性へと、職業観の変質が読み取れる結果が登場した。第3位の「大会社の社長」(21%)と対比して考えると、いわゆるトップよりもヒラを歓迎する子どもたちの胸の内に、社会的責任を回避し、小市民的生活に甘んじようとする傾向が読み取れ、ついにここまでの感を拭えない。実現の困難な途方もない夢を抱いて挫折を味わうより、この程度に押さえて、今をゆるやかに生きることの方が得策だという考え方に、悲しさが漂う。

そうした意味では、図2に示したように、

図1・男子のなりたい職業

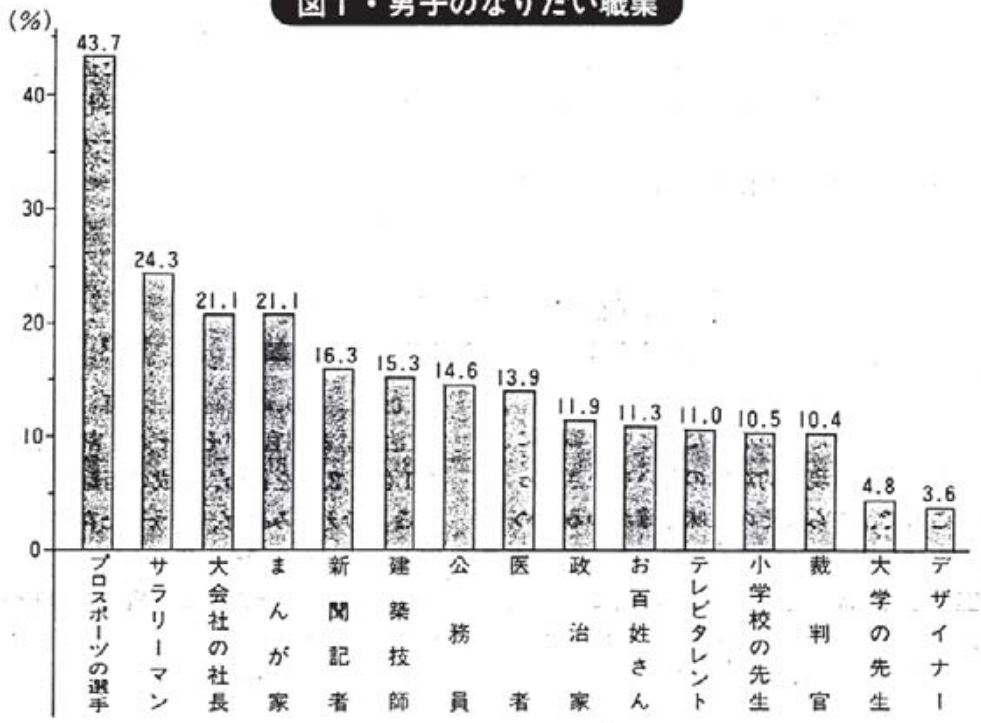
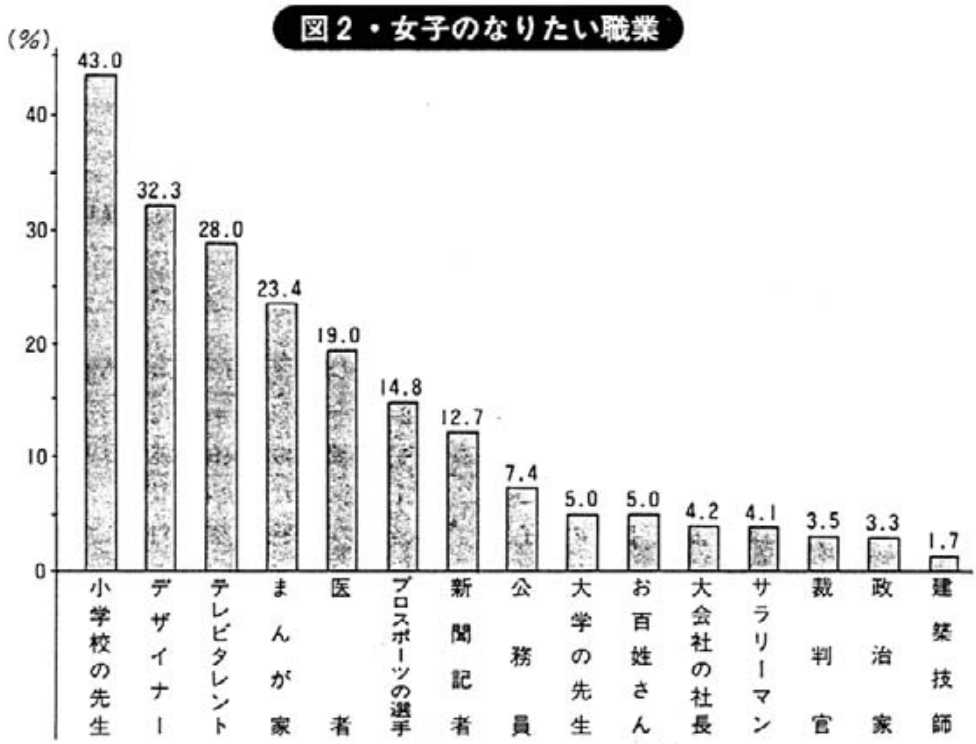


図2・女子のなりたい職業



女子が選択する「小学校の先生」(43%)もごく身近に存在し、実現の可能性が感じられての結果であろう。以下に続く「デザイナー」(32%)、「テレビタレント」(28%)、「まんが家」(23%)は、男子の「プロスポーツの選手」に対応するかすかな夢の部分と読み取ることができる。

ちなみに、用意した15の職業について、子どもたちが○をつけた数、つまり選択数の平均を試算してみると、男子で2.3、女子で2.0となる。あれもこれもと選択の幅を拡げるのではなく、慎重に2つほどを選んだことを想像し、その結果がここに述べた通りであることを考えると、いかにもつつましやかな夢の表現ぶりに、いじらしさを感じてしまう。

なれそうもない職業

さて、子どもたちがなりたいという職業に、夢よりもむしろ現実的対応の臭いをかぎとったところで、さらにその意味を確かめるために、なれそうもない職業と比較してみよう。

図3と図4は、前と同じ15の職業について、どんなに頑張ってもなれそうもない職業について選択させた結果である。男子女子とも、「政治家」「裁判官」がそれぞれ7割ほどの高率で1位と2位を占め、達成の困難さを示している。考えてみれば、こうした存在が、子どもたちの日常生活から縁遠く、どういう手続きを踏めば、政治家や裁判官になれるかを確かめるまでもなく、どっちみち駄目とする子どもの胸の内はわかるような気がする。しか

し、問題なのは、なりたい職業をあこがれ率として合わせて示したグラフからも読みとれるように、ほとんどの項目において、断念率があこがれ率をはるかに上回っているという事実であろう。わずかに、男子では、「プロスポーツの選手」と「サラリーマン」が、女子では「小学校の先生」と「デザイナー」があこがれ優位の傾向にある。このいずれもが、男女それぞれのなりたい職業の1位と2位にランクされていたことを考えると、これらが、子どもたちにわずかに可能性が残された"最後の砦"と言えるのかもしれない。

念のため、ここでもなれそうもない職業の選択数の平均を試算し、表1にまとめておいた。なりたい職業がほぼ2つであるのに対して、なれそうもない職業はその3倍にも及ぶ。子どもたちの職業観の奥底に根強く存在しているのは、達成を断念した一種の挫折感なのだろうか。

図3・職業の断念率(男子)

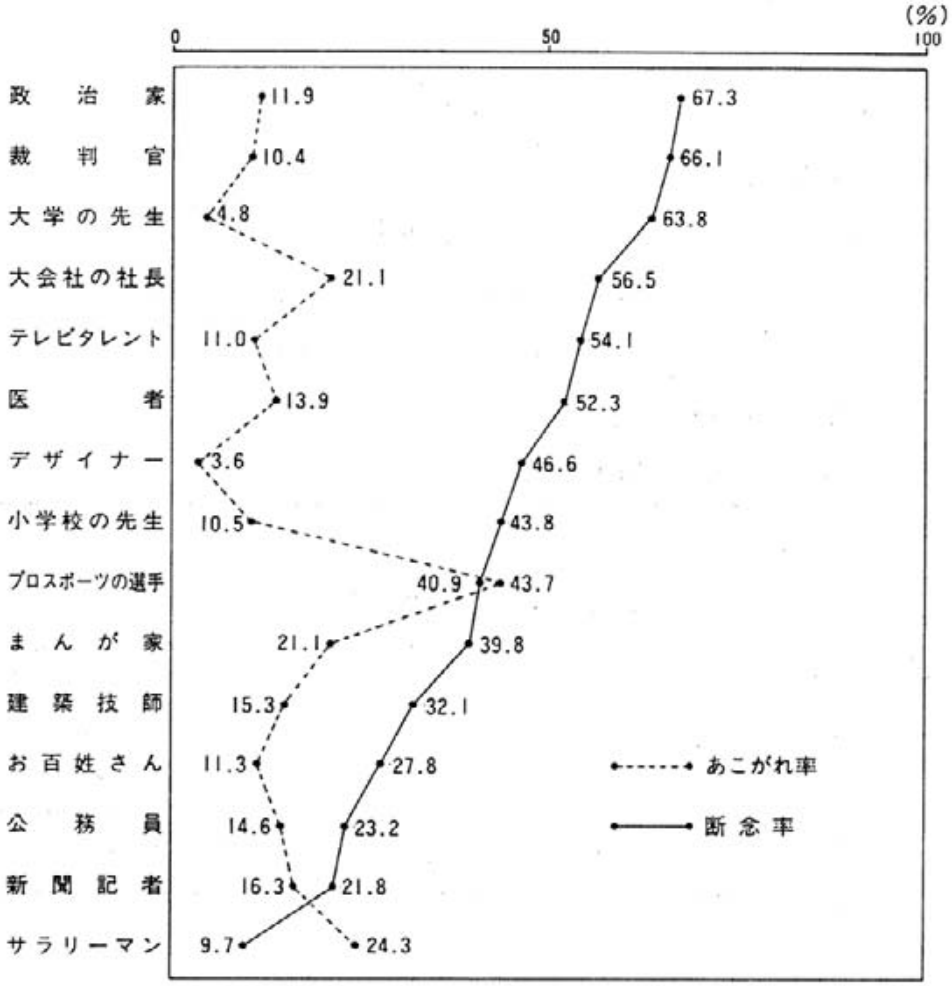


図4・職業の断念率(女子)

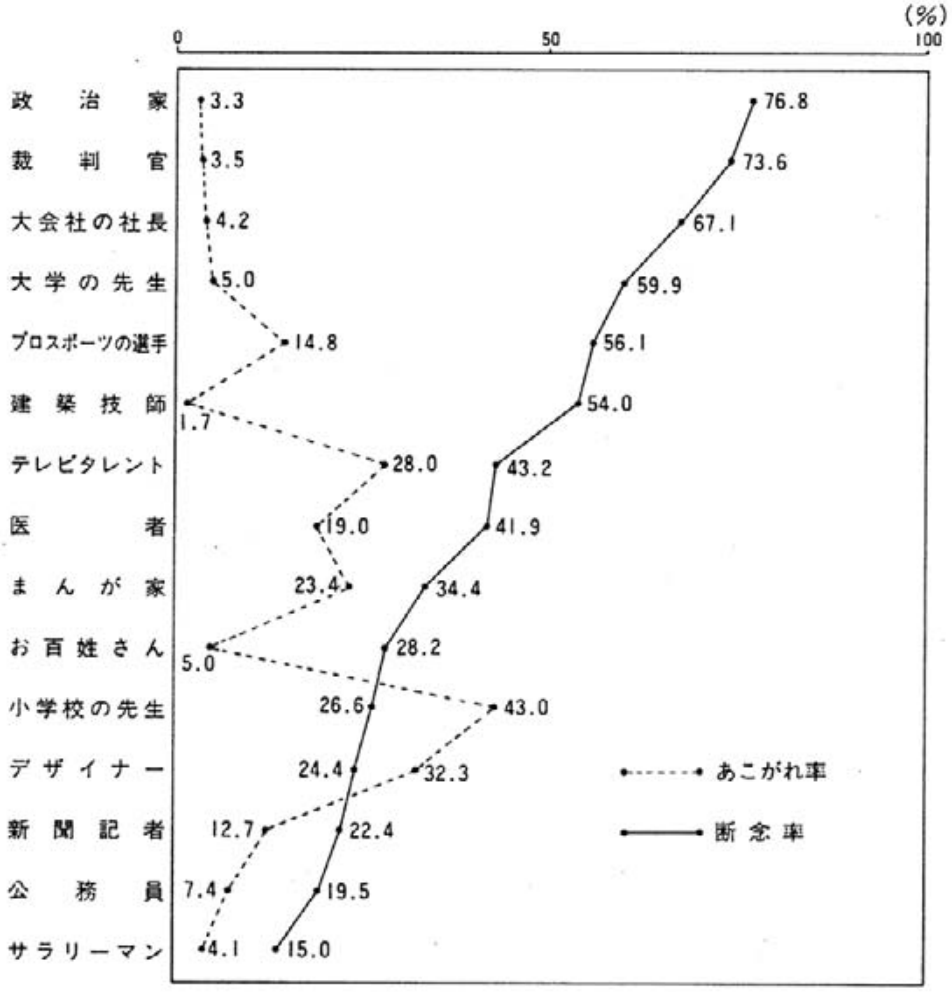


表1・選択件数の比較

(件数)

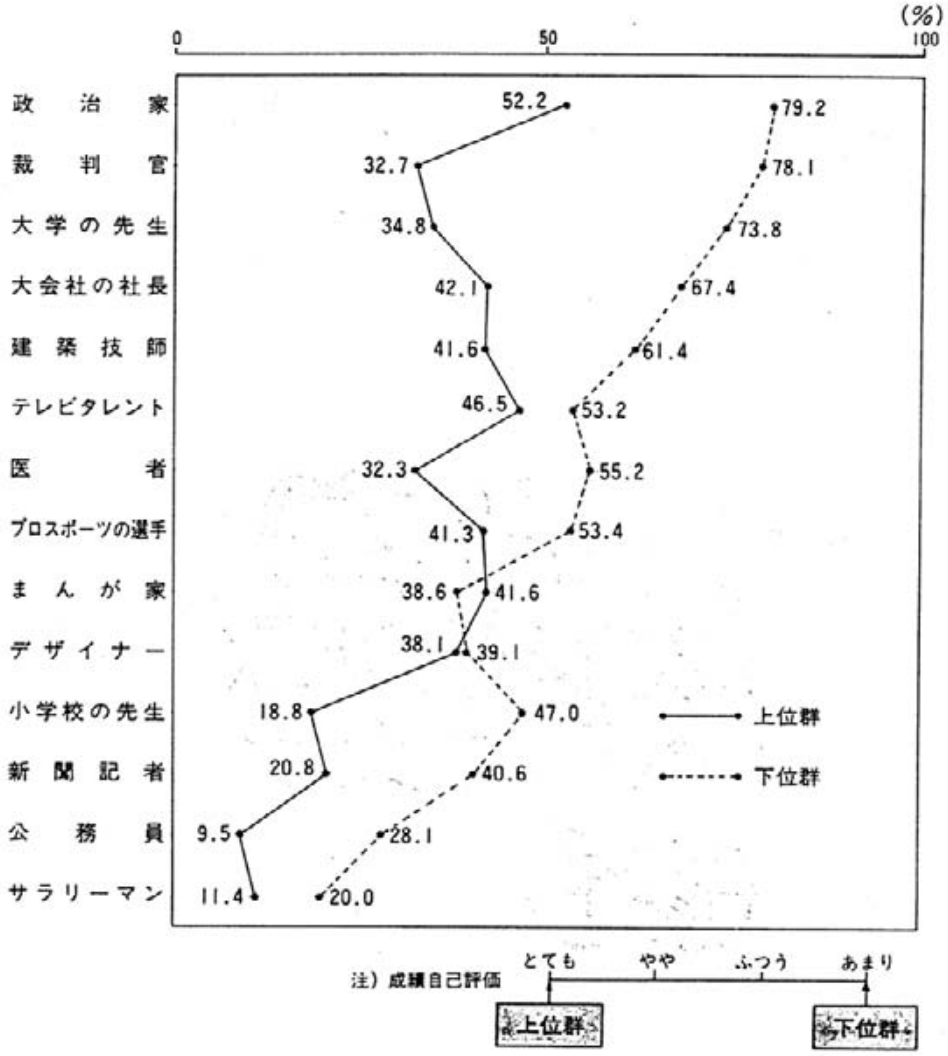
項目＼性別	男子	女子
なりたい職業	2.3/15	2.0/15
なれそうもない職業	6.4/15	6.4/15

成績の持つ意味

以上、見てきたように、予想以上に子どもたちの職業選択は慎重であった。その背景を探る一つの視点として、ここでは学業成績の持つ意味との関連を見ることにしよう。

図5は、成績に自信がある子どもと、そうでない子どもとの断念率を比較して掲げたものである。図から読み取れる通り、成績自己評価の上位群と下位群の断念率は、「裁判官」の

図5・成績自己評価×断念率



（※「「孤立化する子どもたち」深谷昌志・1983・ＮＨＫブックス」より引用）

45%を筆頭に各職業とも顕著な差があり、成績の良し悪しに関係ないのが、わずかに「まんが家」と「デザイナー」の2つである。すなわち、この2つを除くほとんどの分野で、現在の成績が成功の鍵を握っていると考えており、現在の自分の成績にもうひとつ自信を持ちきれない子どもは、未来の職業生活をバラ色に描けないということになる。

そのあたりの事情をもう少し詳しく追ったものが、**表2**と**表3**である。

表2では、前で説明した15の職業の中から6つをピックアップし、算数・体育・音楽の成績と達成の可能性を示してある。「政治家」になるためには、算数の成績でクラスの10番以内に入っていなければ無理だとする子どもが85%、同様に体育では44%、音楽では40%という結果である。

いずれの職業においても、とりわけ算数の成績がものを言っており、最も数値の低い「テレビタレント」でも58%を示し、体育や音楽も良くなければ駄目（それぞれ74%、86%）と、成績の中位以下の子どもの職業選択は八方ふさがりの状態である。

表3は、小学校・中学校・大学と発達を追って、やはり成績と断念率との関連を見たものである。6割から7割を超える子どもは、すでに小学校で10番以内に入っていなければ「政治家」にも「大会社の社長」にも「医者」にも「小学校の先生」にもなれないと考えており、中位以下の子どもは「テレビタレント」か「サラリーマン」にでもなるしかないと、苦しい胸の内を告白する。

このように、職業選択に現実的な対応を示す子どもたちは、そのファクターとしての学業成績を、必要以上と思えるほどに重視していた。〈裁判官になるためには一流の大学を出て……〉といった類の情報が子どもたちの耳に届けば、こうした対応も無理からぬところであるかもしれないなと思わずにはいられない。

表2・教科の成績×職業的可能性

(%)

		下の方でもよい	まん中ぐらいでもよい	10番ぐらいでないと駄目	5・6番ぐらいでないと駄目	1・2番でないと駄目
		成績中位以下		成績上位		
政治家	算数	3.9	10.7	15.1	33.0	37.3
		14.6		85.4		
	体育	21.9	33.7	22.2	14.4	7.8
		55.6		44.4		
	音楽	23.9	36.4	20.1	12.5	7.1
		60.3		39.7		
大会社の社長	算数	3.5	7.1	12.0	25.3	52.1
		10.6		89.4		
	体育	18.7	32.9	21.1	16.8	10.5
		51.6		48.4		
	音楽	23.5	32.7	19.6	14.4	9.8
		56.2		43.8		
医者	算数	3.4	8.3	10.5	26.5	51.3
		11.7		88.3		
	体育	11.7	25.3	24.1	23.0	15.9
		37.0		63.0		
	音楽	24.1	33.9	20.0	14.6	7.4
		58.0		42.0		
小学校の先生	算数	2.0	4.0	6.8	24.2	63.0
		6.0		94.0		
	体育	2.1	5.4	11.4	30.0	51.1
		7.5		92.5		
	音楽	2.6	7.9	14.6	29.9	45.0
		10.5		89.5		
テレビタレント	算数	15.0	27.5	24.9	23.1	9.5
		42.5		57.5		
	体育	8.5	17.3	21.0	28.8	24.4
		25.8		74.2		
	音楽	5.6	8.2	10.2	20.3	55.7
		13.8		86.2		
サラリーマン	算数	7.0	22.2	22.0	25.4	23.4
		29.2		70.8		
	体育	12.4	31.6	28.8	19.4	7.8
		44.0		56.0		
	音楽	20.3	38.6	25.5	11.9	3.7
		58.9		41.1		

表3・学校の成績×職業的可能性

(%)

		下の方でもよい	まん中ぐらいでもよい	10番ぐらいでないと駄目	5・6番ぐらいでないと駄目	1・2番でないと駄目
		成績中位以下		成績上位		
政治家	小学校	8.3	25.7	29.2	22.8	14.0
		34.0		66.0		
	中学校	1.6	7.5	23.8	42.8	24.3
		9.1		90.9		
	大学	1.0	2.2	8.2	26.1	62.5
		3.2		96.8		
大会社の社長	小学校	8.8	24.8	26.4	25.4	14.6
		33.6		66.4		
	中学校	2.6	10.0	24.6	38.4	24.4
		12.6		87.4		
	大学	1.6	3.8	12.3	29.6	52.7
		5.4		94.6		
医者	小学校	4.8	16.5	25.4	28.1	25.2
		21.3		78.7		
	中学校	1.4	5.9	18.0	35.4	39.3
		7.3		92.7		
	大学	0.6	2.0	5.8	21.9	69.7
		2.6		97.4		
小学校の先生	小学校	6.5	19.2	22.5	26.9	24.9
		25.7		74.3		
	中学校	2.0	7.5	22.7	35.1	32.7
		9.5		90.5		
	大学	1.0	3.3	10.0	28.0	57.7
		4.3		95.7		
テレビタレント	小学校	18.7	34.7	25.1	14.9	6.6
		53.4		46.6		
	中学校	10.3	27.2	29.2	23.5	9.8
		37.5		62.5		
	大学	9.4	20.1	21.1	29.4	20.0
		29.5		70.5		
サラリーマン	小学校	15.0	36.6	27.1	15.4	5.9
		51.6		48.4		
	中学校	6.0	30.6	30.6	24.2	8.6
		36.6		63.4		
	大学	4.0	22.7	27.5	26.7	19.1
		26.7		73.3		

2. 子どもの中の職業イメージ

将来の職業に対する態度決定について、ここまでは、学業成績との関連を中心に追ってきた。それ以外にも、例えば、高度に発達した情報網の中で暮らす子どもたちが、さまざまな職業に関する情報をキャッチしているとしても不思議ではない。ここでは、そうした結果、子どもたちがどのようなイメージを、それぞれの職業について描いているのか、いくつかの視点から追ってみることにする。

行動特性と職業

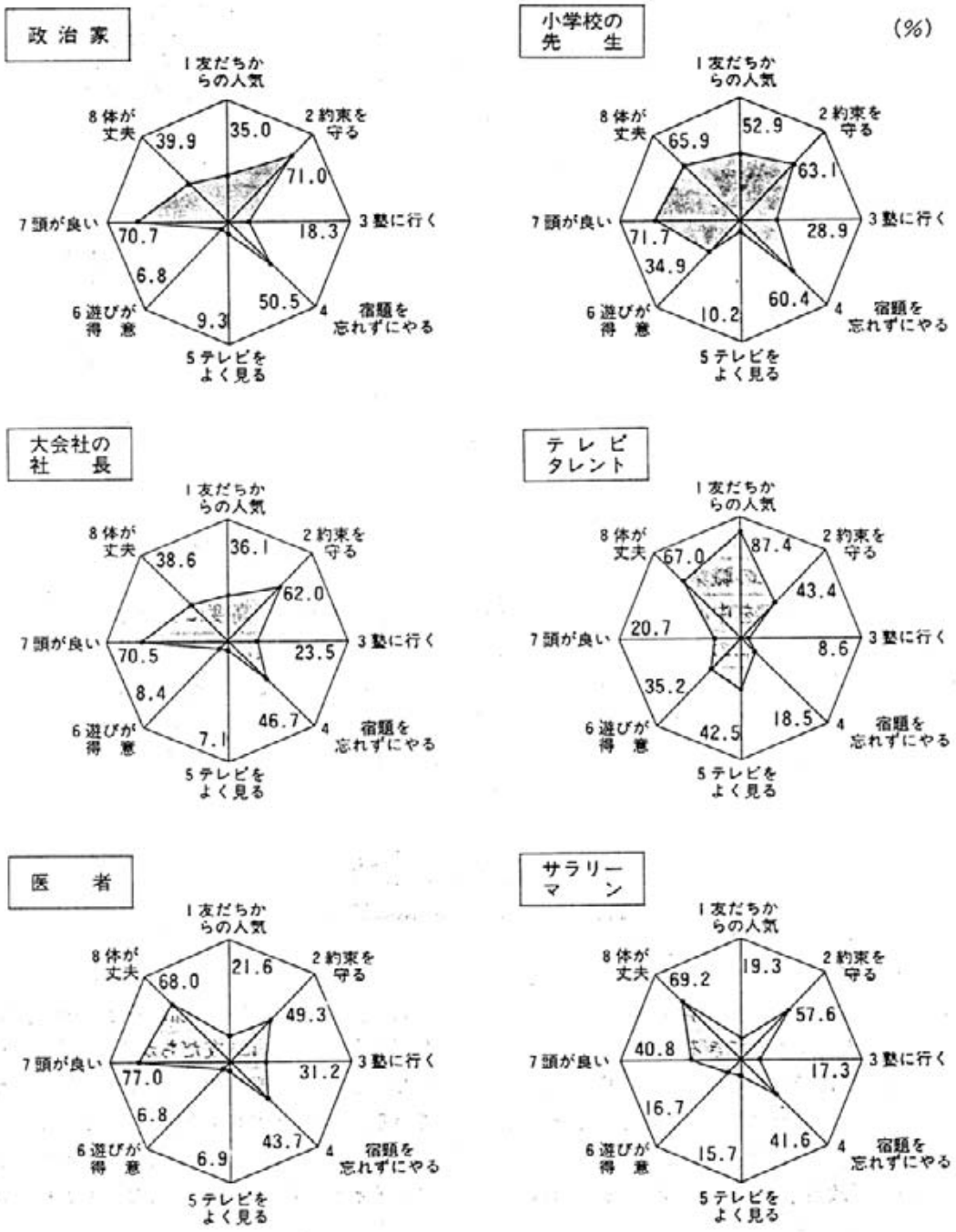
まず、図6は、6つの職業について、行動特性や性格を中心に、小学生の頃どんな子どもだった人がうまくできるかを問い、スパイダーグラフに示したものである。中心から外側に向かってグラフが拡がるほど、さまざまな性格・特性を必要とすることになる。

まず、「政治家」と「大会社の社長」がほぼ同様なプロフィールを描き、特に「約束を守り」「宿題を忘れずにやり」「頭が良い」子どもだった人が向いていると値踏みしている。これに、「体が丈夫」という条件が加わると「医者」になれそうで、さらに「友だちからの人気」があった子どもは「小学校の先生」になれると考えている。「テレビタレント」は人気と体力が、「サラリーマン」は体力と誠実ささえあればとする子どもたちの評価は、当たらずとも遠からずといった気もする。

このように思い描く職業イメージの中で、

子どもたちは、現実の自分の姿と照らし合わせて、取捨選択をしていくのであろう。能力は問われず、体力と誠実さだけなら何とかなるかもしれないと、不安気に自らを値踏みする子どもたちが、「サラリーマン」を選択するというパターンが、ここからも読み取れる。

図6・職業プロフィール



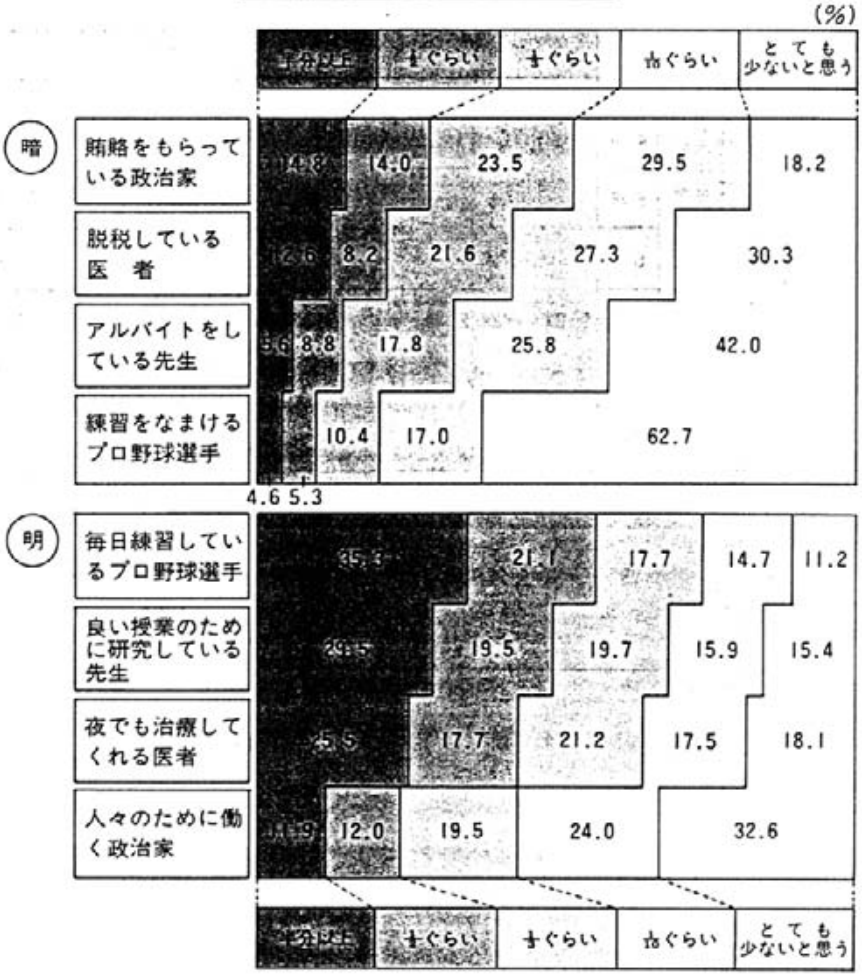
イメージの明暗

次の図7は、脱税や賄賂といった職業に絡む地位利用の犯罪が絶えない昨今、そうしたことが、子どもの職業イメージ形成にどんな影響を与えているかを、とらえようとした結果である。

用意した4つの職業の中で、最も暗いイメージ、言い換えればダーティだとされているのは、やはり政治家で、「賄賂をもらっている政治家が半分ぐらいはいる」と考える子どもは約3割に達し、1割ぐらいまでその枠を拡げれば、実に8割に及ぶ子どもたちの中に、すでに政治家不信の傾向が読み取れてしまう。逆に、「人々のために一生懸命働く政治家」は「とても少ない」と思っている子どもが、3割を超え、自らの能力云々の以前に、達成目標のリストからすでに外れている職種があることも、特筆しておかねばならない。

逆に好意的に評価されているのが「プロ野球の選手」であり、それが男子のなりたい職業ナンバー1であったことを合わせて考えると、それぞれの職業人の子どもたちに対する責任の深さに改めて気づかされる。

図7・職業イメージの明暗



なくてはならない仕事と自分

図8・9・10は、社会的な役割としてなくてはならないが、それが名誉や金銭に結びつかない仕事に対する評価の結果である。

あまり目だたないが、世の中になくてはならない仕事をしている人は、自分に誇りを持っていると、学年が上がるにつれて、その意義を認める傾向にある。しかし、それではあなたにやる気があるかと問われれば、尻込みをして、責任を他人に委ねる。他の2つについても全く同様な結果となっていて、当事者意識の希薄さをのぞかせる。職業そのものは、あくまでプライベートなことがらであって、社会的な役割とは切り離して考える子どもたちに、ある種の打算が働いていることがうかがえる。

図8・目だたない仕事

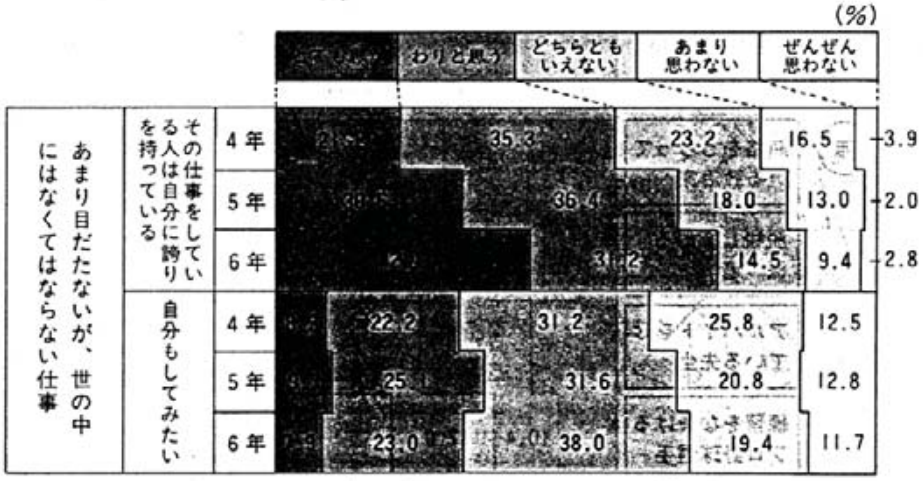


図9・みんながやりたがらない仕事

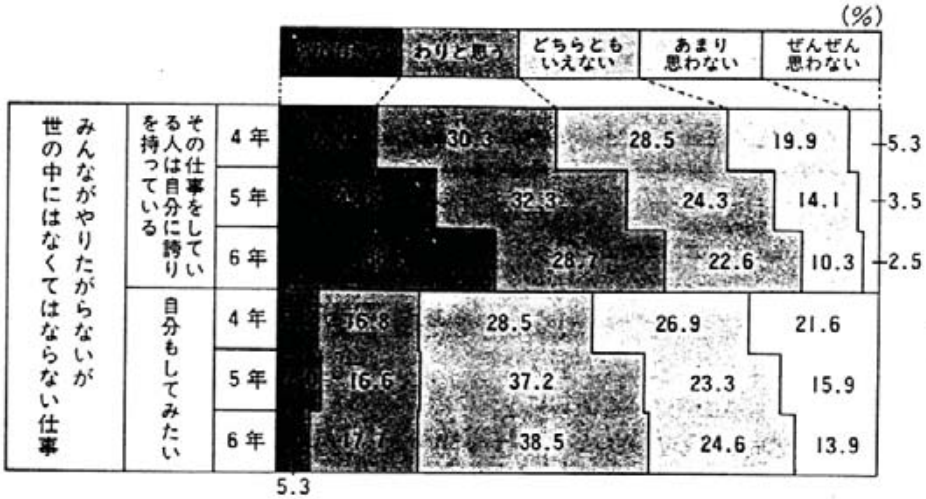
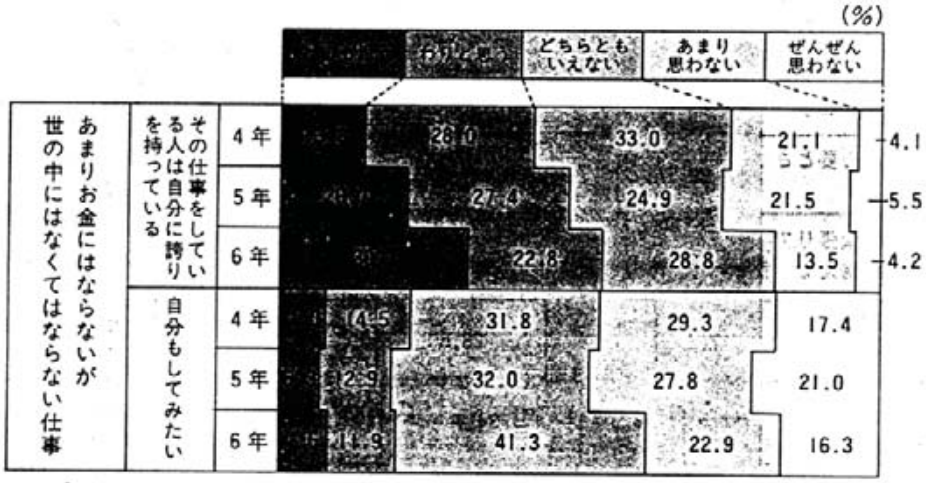


図10・お金にならない仕事



好まれる職業の条件

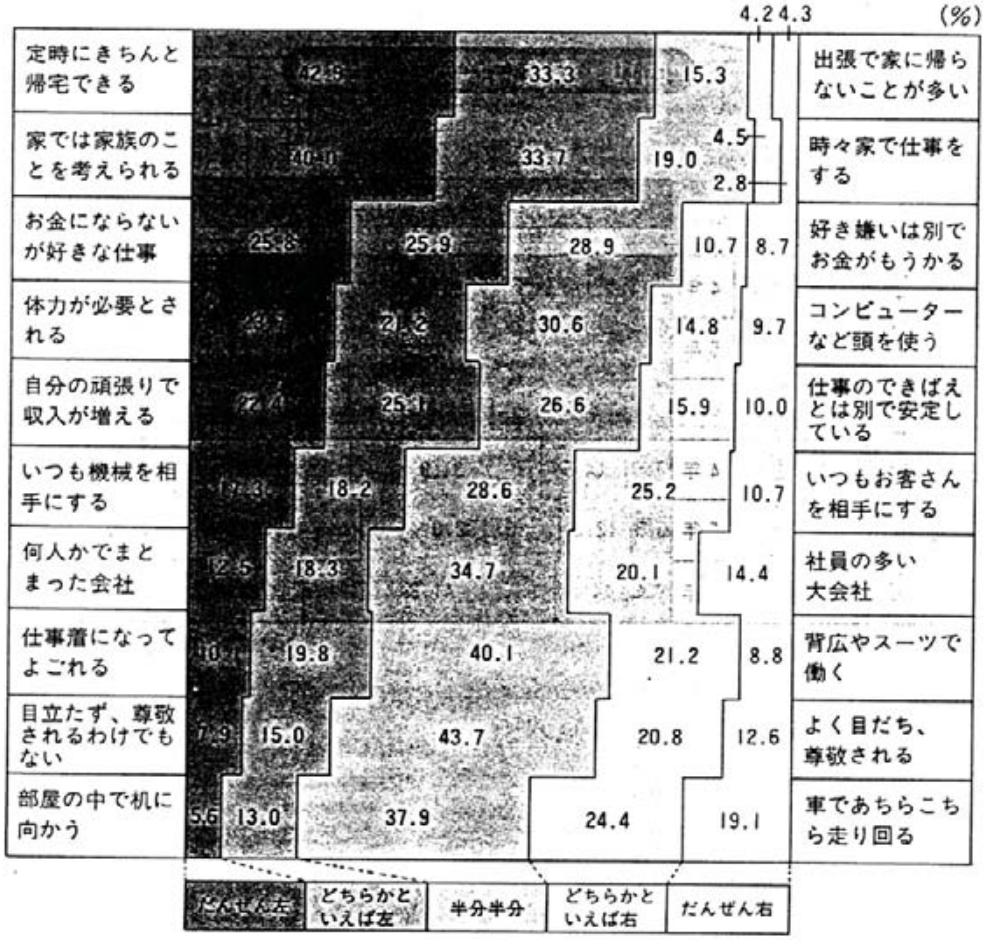
この章のまとめとして、これまで見てきたようなイメージを抱いている子どもたちが、それでは一体、職業に対してどのような条件を望んでいるのかという点に触れておきたい。

図11は、左右の項目をペアにして、どちらを望むかということを尋ねた結果である。

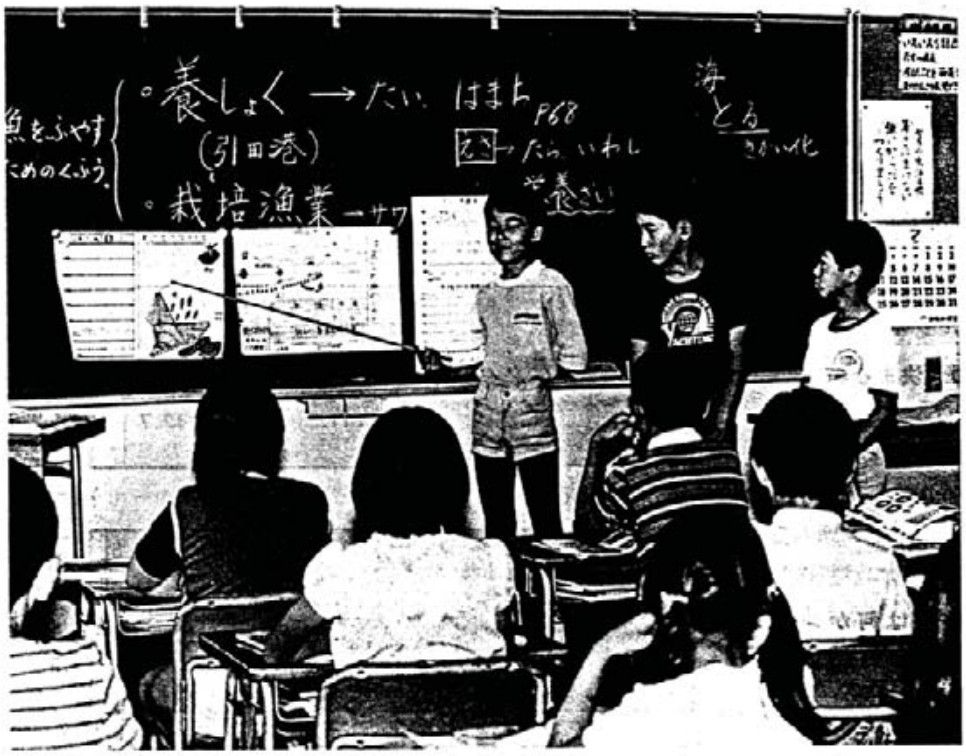
上位から連ねて、そのプロフィールを描くと、〈決まった時間に帰宅して、家族との団らんの時間が持てるような、そして、収入はほどほどでいいから好きな仕事をしたい〉と、顕著なマイホーム志向がうかがえる。そして、意外なことに、カッコいい職業の代表と目された、コンピューター関係はむしろ敬遠され、わずかではあるが、ブルーカラー志向すら漂ってくる。

学業成績に関する自信を失い、最後に残された体力と誠実さを資本として、こじんまりとした生活の設計を図ろうとする子どもたち。こう読み取ってしまうのは、いかにも心苦しいが、暗さのイメージに降下していく子どもたちにとって、将来の職業生活を展望することは、すでに夢のひとかけらも入り込む余地のないほどに悲惨なものなのであろうか。

図11・好まれる職業の条件



3. 職業生活の設計



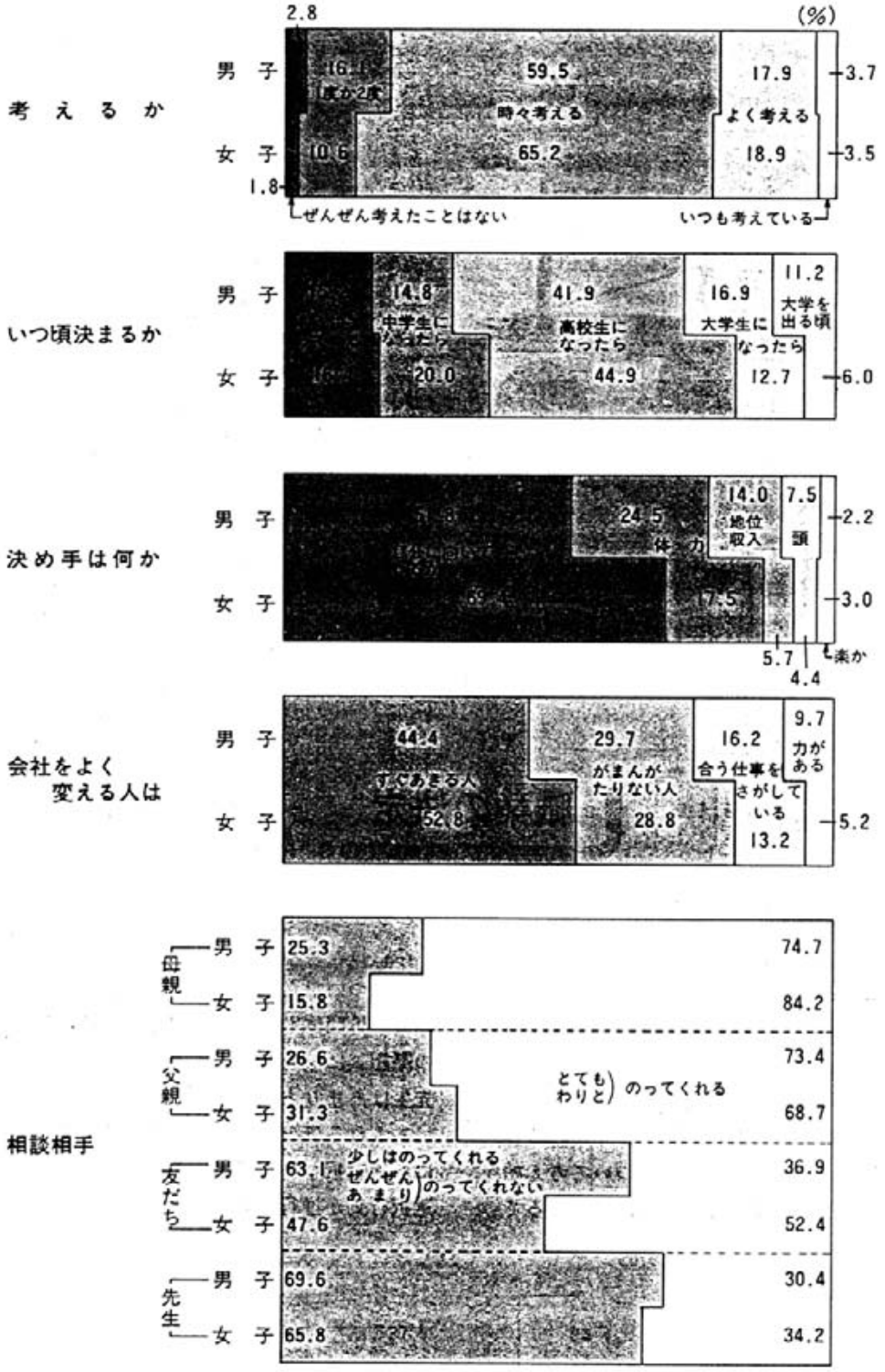
職業の決定

最後に、これまで読み取ってきたデータのおさらいの意味で、子どもたちが今、将来の職業のことをどの程度考えているのか、そして、その見通しは、といった点について整理してみよう。

図12は、職業決定の手続きについて整理したものである。8割を超える子どもたちは、すでに何らかの形で職業選択について考え始めており、高校生になる頃にはほぼ固まるであろうと思っている。その際、決め手となるのは、自分に向いているかどうかであり、一度職についたら、なるべくあれこれ変わらない方が世間体もよさそうだと考えている。その際相談にのってくれるのは、やはり両親で、先生はあまりあてにならない……。

あふれるほどの職業情報を子どもたちなりに取捨選択し、冷静に、そして意外な速さで選択行動が進行している。

図12・職業を決めるのに



今後への見通し

最後に、こうした子どもたちが、将来の生活をどのように見通しているかを、概観してまとめとしたい(図13・図14)。

職場への女性進出がごく普通になってきている現在ではあるが、図14に示したように、女子は必ずしも男性と対等に渡り合うことを望んでいない(60%)。これに呼応するかのように、図15に、結婚相手がそのまま仕事を続けることを望まない男の子がいる(54%)。あくまでマイホーム優先の子どもたちである。

さて、その結果としての家庭生活を想像させたデータが、最後の図16である。「家族全員が幸せに暮らせる」と想像する子どもが、男子で7割、女子では8割、そして、「今より暮らしがよくなっている」と考える子どもが、それぞれ43%と36%。概して、かなり明るい見通しを持っている。

もはや、将来の職業を語ることが、夢を語ることとは、同義でなくなってしまった。達成動機を獲得して、それに向かって頑張るというより、家庭生活を安定させるのに足るだけの条件を満たす方便として考えられている節がある。それはそれでいいのかもしれない。しかし、こうして読み取ってきた、文字通りの"モラトリアム化"の進行に、歯止めをかける方途はないものだろうか。

図13・将来の職業生活への見通し(男子)

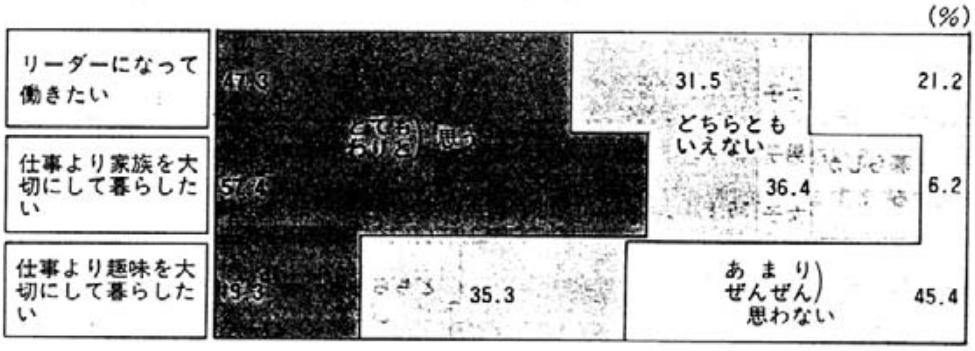


図14・将来の職業生活への見通し(女子)

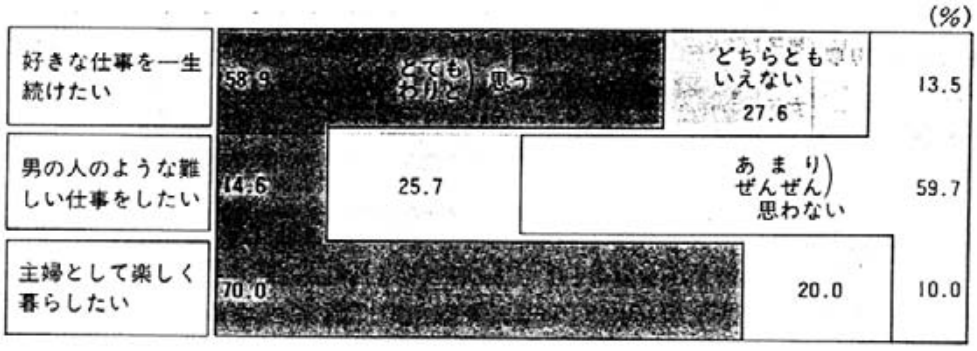


図15・結婚相手の条件

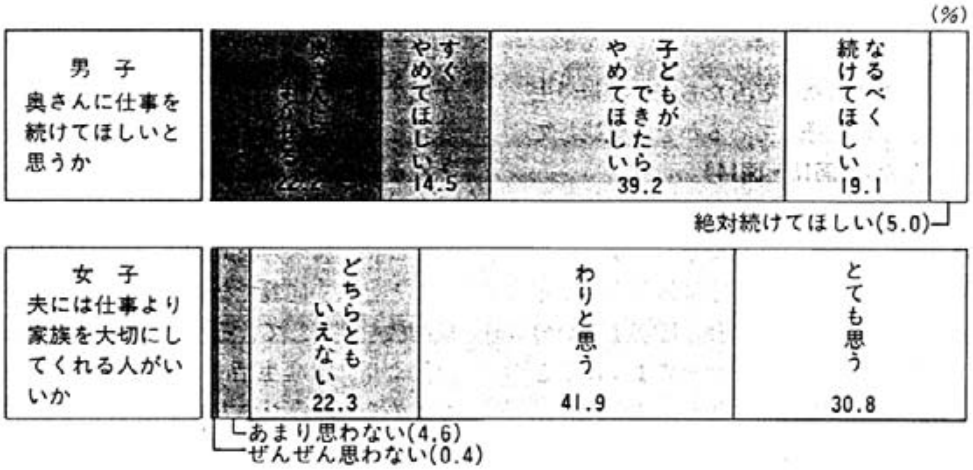
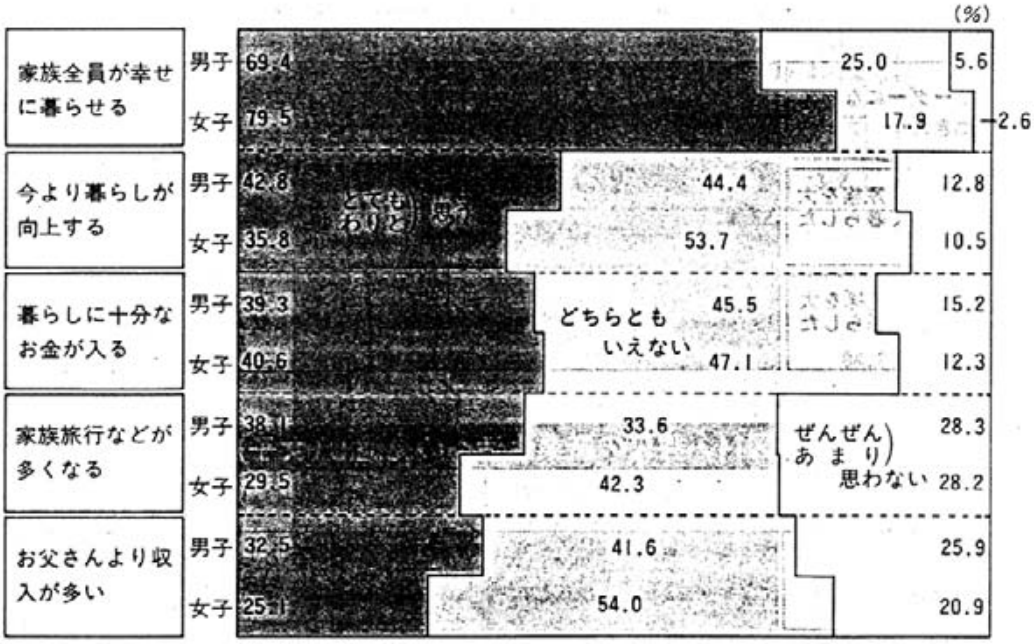


図16・将来の家庭生活の見通し



まとめに代えて

職業についての生きた見聞を拡げよう

調査データを読み取りながら、子どもたちの視野に入っている職業が予想外に少ないのを改めて痛感した。

職住の分離の進んでいる現在では、父親の仕事も、子どもに理解しにくくなりつつある。それと同時に、子どもたちの目の届く範囲で全貌を見渡せる仕事が少なくなったのも事実であろう。一例をあげるなら、スーパーマーケットへ行って、スナックを買ってくる。この場合レジの仕事は、ある程度理解できたとしても、そのスーパーが、どういう形で、スナックを仕入れたのかはわからないし、まして、スナックが、どこで作られたのかは、子どもの視野外の出来事になる。

それと同じように、文房具屋や本屋、床屋といった子どもになじみやすい仕事にしても、ある程度から先は、子どもには見えにくい世界となる。

数年前、子どもたちに、父親の働く姿を描かせたことがある。取材の必要から、何百枚かの絵を集めたのだが、その中で目についたのは、生き生きとした父を描いているのは自営業関係を父に持つ子どもに限られていたのと、サラリーマンを父とする子どもの絵が画一化され個性に欠けることの２点であった。

窓ガラスを背にして、机がひとつ、机の上に、電話と湯飲みという構図が、サラリーマンの父を描く時のスタンダードな姿である。もっとも、子どもにしてみれば、父親の職場を見たことがないから、描きようがなく、テレビのドラマで、なんとなく覚えた構図を、父のオフィスにダブらせたのであろう。

このように、子どもにとって、職業が見えにくくなったのは確かであろう。加えて、現在の子どもたちは、中学、そして、高校へ進む道を当然のように考えているから、ここ当分の間、仕事につく必要はない。中には、大学進学を考えている子どもも少なくないから、そうした子どもにとって職業につくのは、10年も先の話となる。そうだとすると、中学校や高校での生活に関心は持てても、仕事には興味を示せないのが当然であろう。

さらに言えば、子どもたちはなんとなく、どの仕事についても、ある程度の生活はできると思っている。飢えを知らない育ち方をしているから、今までがそうであったように、これから先も、仕事につけば、親と同じ程度の暮らしが可能だと信じている。その結果、仕事についての関心は、ますます薄れてくる。

そうした一方、子どもに見える仕事も増加してきている。特に、テレビなどに登場するスポーツ選手や歌手、タレントなどに、その傾向が著しい。自分たちと、さして年齢の開きのない者が、ヒット曲をとばせば、テレビに出演し、海外のロケにも参加し、豪邸を建てる。あるいは、高校卒業の若者が、何千万かの契約金をもらって、プロ入りをし、一軍のマウンドに立つ。

まとめに代えて

そうした姿を見ていれば、ちょっとした才能さえあれば、何百万円ぐらい、手にできると思う気持ちもわいてこよう。中でも、アイドル歌手の歌唱力は、子どもから見ても、それほどあると思えないし、まして、特別にハンサム、あるいは、キュートでもない。自分だって、運さえあれば、アイドルになれると思うのが、子どもとしての当然の心の動きであろう。

もちろん、テレビで伝えるアイドルの姿はほんの一面にすぎない。何千万の契約金をもらって一軍の選手になれるのは、1年を通じて、ほんの数人で、残りの何十人かは、二軍で汗水を流している。また、スターの蔭に何百人かのスター予備軍がいて、結局、スターになることなく、挫折していく。さらに、スターにしたところで、人目に触れぬ所で、人の何倍もの努力を重ねているのであろう。

しかし、テレビには、そうした姿が現れてくることは、まれにすぎない。したがって、子どもたちが知っていると思っているスターの素顔は、氷山の一角にもならないのだが、子どもたちには、そうした事情は理解できまい。

そうした形で、見えない仕事と見えすぎる(と子どもが思っている)仕事との両極化が進んでいるのが、子どもにとっての職業なのであろう。しかも、前者の見えない仕事の方が職種的にみても、圧倒的に多いから、こうした面に注目すれば、仕事が見えなくなったという方が正しいのかもしれない。

子どもたちが将来の仕事を考えるにあたって、出発点となるのは、その仕事について持っている情報量となろう。その仕事がどんな条件のもとで何をするのかがわかれば、子どもなりに、つきたい、あるいは、つきたくないという判断を下すことができるし、その仕事につくための心づもりも可能になる。

しかし、職業の内容がわからないのでは、職業の名を聞き、条件反射でもするように、好き嫌いを言う結果となる。職業についてのイメージを持ち、その職業に心を傾斜させるのを職業的社会化と呼ぶ。現在の子どもたちに欠けているのは、そうした心の準備ではないだろうか。

今回の調査結果の中で、断念率の高さに象徴されるように、夢を持たない子どもたちの姿が印象に残った。そうした結果も、職種を知らないから、難しいと思い、とてもつけそうにないと答えたのだとすると納得ができる。なれるなれないは別の問題として、たくさんの仕事を子どもたちに知らせ、選択の幅を拡げさせる必要がある。そうした職業への心づもりの見通しの上に、勉強が成り立つのが本来の姿であろう。そのためには、まず父親が、仕事の話を子どもに伝えることが、出発点となるように思われてならない。